

東京美術學校長正木直彦殿

④ 東京美術學校入學案内

本校の組織、規則、教育内容等は毎年刊行の『東京美術學校一覽』に記載され、公表されているが、民間発行の受験生向け学校案内のなかには予備校、各科の募集状況、学費その他、『一覽』では窺い知れない要素をも含めて本校の特色を端的に紹介しているものがある。左記はその一例である。

美術學校

〔目次、「日本唯一の學校、「八分科の各特色」は省略。〕

入學の研究

學年は九月十一日に始つて、七月十日に終る。そして一學年はこれを三學期に分けてある。

第一學期（自九月十一日至十二月二十四日）

第二學期（自一月八日至三月三十一日）

第三學期（自四月八日至七月十日）

併し、入學期は毎年四月の初頭、それから七月十日迄の一學期間を、豫備科期としてある。（この期間を無事に過ぎると、本科の第一學期が初めて来る。それから四年間追通^{おつとほ}して、五年目は卒業期と稱し、第貳學期限りで卒業する事になるのだ。）それで、假令三月の試験に合格して、豫備科に入學を許されるにしても、決して全くの安心は出来ぬ。其の一學期間の實技成績の良否は、一般の豫備科生に取つて、實に死活の運命の決勝點である。烟眼

なる受持教師は、其間に、彼等の實際の技倆から、將來發達の有無に至る迄能く／＼見抜いて、六月の試験を待つ迄もなく、早く既に心で及第の鑑定を付けて了ふ。

だが、それは兎も角として、本科入學に就ての研究が何よりも肝腎である。

先づ、本科に入學することの出来る者は、年齢滿十七歳以上滿二十六年以下の男子で、品行身體共に善良でなければならぬ。

次は、左の資格の何れか一つが必要だ。

- 一 官公立中學校又は認定私立中學校卒業者
- 二 専門學校入學檢定試験合格者
- 三 認定工業學校卒業者

但し、右に掲げた學校に在學中の生徒で、三月の末に卒業すると云ふ慥かな證明のあるものに限る、特に卒業生同様に看做して取扱ふと云ふ規則だから、この學校の入學期迄に、正式の卒業が出来ずとも差支へない。尤も、昨年の末であつたか、文部省から各地方廳へ通牒を發して、中學校の學年試験は、第五學年の生徒に限り、三月上旬以後に便宜繰上げて好いと云ふ事になつたから、此邊は餘程便利になつたと思ふ。

應募の手續は別に詳しく説明する迄もないだらう。即ち一定の書式に準じた入學願書に、學業履歷書、卒業證明書、又は試験檢定合格證書、醫師の身體検査書、戸籍抄本、志願當時よりさかのぼる一年以内に撮影した手札形寫眞（但し、半身脱帽で、裏面に氏名並びに撮影年月日明記の事）等を添え、それに、金貳圓を手數料として納付すれば好い。本年、官報（一月十五日）で發表に

なつた出願期は、三月十四日迄と規定してあつた。この後とも、入學期の改正のない限りは、これと大差はなからうと信ずる。

次に、他の一種類、即ち圖書師範科志願者の入學手續である。入學期は矢張本科豫備科のと同様であるが只異なる點は、本科志願者が願書を直接學校に差出すに反して、これはそれ／＼地方長官の手を経て廻送されるの一事である。(但し、時宜によつて、地方長官の薦擧を待たずに、直接募集する事がある。)

この科の入學志願者は、年齢滿二十四年以下の男子で、品行の善い事と、身體の健全を要することゝは無論だ。その資格は――

一 道廳府縣師範學校卒業者

二 官公立私立中學校卒業者

三 専門學校入學檢定試驗合格者

それで、圖書師範科生徒募集の季節が來ると、この學校の校長から、各地方長官へその由の通知が行くから、地方の志願者に於ては豫めこれに注意して居てその手續に及ばなければならぬ。願書類は、本科志願者のものと同一である。但し、金二圓の入學手数料は特に免ぜられる事になつて居る。

今年三月執行の實技試験

本科の豫備科並びに圖書師範科共、入學志願者は既に一定の資格を備へて居る者のみであるから、別に入學試験は施さぬ。けれど、實技の試験は大にある。これは宜しく斯くあるべきことで固よりこの學校の志願者は各自の技術に恃んで、兼ねて將來の大抱負を荷つて居る人々であるから、この競技試験には、滿腔の喜悅

を以て臨むに違ひない。毎年の各學科志願者は、所定の募集人員を大抵おつかつか。^{〔マウ〕}若くはそれ以下か、殊に工藝部の金工、鑄造、漆工等の學科になると、豫定人員に滿たない事が普通で、相當――即ち入學し得る丈の技倆さへ具備して居るものならば、十中八九迄はパスするに極つて居る。

今、志望者諸君の參考に資せん爲め、本年三月執行に係る實技試験の結果を報告しやう。

學科別	募集人員			應募者			入學許可者				
	日本畫科	西洋畫科	彫塑製造	牙影	刻木影	科	圖案科	金工科	鑄造科	漆工科	圖案師範科
學科別	二五	二五	一〇	五	五	五	一〇	一〇	一〇	一〇	二〇
募集人員	二五	二五	一〇	五	五	五	一〇	一〇	一〇	一〇	二〇
應募者	二四	九一	九	一	三	九	二二	四	三	四	二五
入學許可者	二四	三一	九	一	三	九	一二	三	三	四	二〇

ここに注意すべきは、日本畫科に對する西洋畫科應募人員の比較である。勿論、此傾向はこゝ三四年前から少しづつ顯はれて居ぬではなかつたけれど、今年の如き激増を見たのは學校でも意外の現象として居る位だ。その結果、豫定人員より六名増して入學を許可して居乍ら、而も約三分の二が不入學者として残された譯である。

彼の大學豫科や高商の入學志願者は別としても、競争試験と云ふことには、丸で没交渉であつた美術學校志願者の入學に於て、斯かる目醒しい數字を見たのは寔に驚くべき事實であると思はれる。併し、これが、とりもなほさず現代思潮の有力なる説明書となるのではあるまいか。試みに、今日の中學生が主催者となつて活動する、紀念祭や何かの機會に遭遇して見玉へ。其邊に張付けたピラ札や、招待券、意匠畫——目に止まるもの一として、洋畫趣味の溢れないものはないであらう。青年雜誌へ投稿するスケッチ畫や繪葉書や水彩畫のそれに徴しても容易に解る。洋畫の極めて新しい匂や調子が、一線一畫にも微見えて居るのに氣が付くのだ。

それに、春や秋の好時節に行はれる、白馬會や太平洋畫會の派手な展覽會、また昨年から大々の規模の下に催された公設展覽會——開期は僅か三十日前後の短時間であるけれども、これが爲め社會の耳目を波立たせることは非常で且つ、洋畫の製作品は概して華やかで、如何にも人の心をチャームする魔力を持つて居るから。さらでだに時代の文學や詩歌の感化で情操が優美にデレケートに傾いて居る折柄、若き人の心は譯もなく動かされて、美神

の捕虜となつて了ふのもまた無理もない事である。吾人は以上の傾向を以て、比較的幼稚な日本の美術界の爲めに、寧ろ祝すべき現象の一つであらうと思ふ。尙ほ、明年度後の入學志望者數は如何なる方面に増減があるか、此點は一寸今から豫言し兼ねるけれど、少くとも洋畫科の大勢丈は、素々需要の少ない、地味な工藝部の各學科は固より、最も有勢な日本畫科の力を以てするも、これを堰止める事は決して出来ないと思ふ。

卒業迄の學費計算

授業料は一學年貳拾圓宛である。だから、豫備科の一學期から、卒業期の二學期を通じての五年間に、百圓あれば足りるのである。併し、其他の經費が一寸問題だ。或人などは、美術學校の生徒になると、材料購入の費用が非常にかゝるから、前後の五年間の學費は優に高等學校から、大學卒業迄の總費額に匹敵すると説いて居る。實際だらうか。此點に就ては、吾人は屢屢地方の入學志望者などから、質問を受けるのだが、これは實の處至難の問題で、到底明確な答案は望まらるべくもない。何故とならば、同じ美術學校の生徒にも充分に學費を受け得ると否とに依つて、一年間の費額に非常な相違を示すことになるからである。

こゝに、同校の教務課で作られた一學年學費概算表がある。

△金三十五圓 學校用品

△金二十圓 授業料

△金二圓 校友會々費

△金一圓 夏帽子新調

△金五圓 靴代

△金百二十圓

下宿料

△金三十六圓

小遣雜費

合計金二百十九圓。それに、在學中の制服制帽調製費が三十八圓五十錢（一學年、七圓七十錢の割）、總高一個年金二百二十六圓七十錢と云ふ事になる。五年間では、金一千百餘圓となる。

尤も、『學校用品』の一項が各學科に依つて幾分か違ふ。西洋畫や彫刻や鑄造やでは、材料が高價だから、三十五圓以上に出やうし、圖案、金工、漆工は、大抵其邊の所で濟むかも知れぬ。

それで、これを高等學校から大學卒業迄の學資總額に對峙させるのは、稍不當のやうに思はれるけれど、兎に角、他の高等專門學校在學費に比べて、略ぼ倍額に近い學資金を要することは吾人の保證する所であるけれど、卒業期近くの學年になれば、各學科——特に畫の方や圖案の方の生徒間では、手蔓を求めて、相當の内職に就く事も出来るから、この方の収入に依つて或は學費の一部分位は負擔する事が出来るかも知れない。但し在學中に内職をして金を取ると云ふ風のことは、餘り奨励すべき事ではない。學資不足の場合に、最後の手段として保留して置く迄の事で、初めよりこれを勘定に入るとは先づ避けた方が宜しいだらう。

以上は、本科に關した事柄であるが、他の一方、圖書師範科の生徒に在つては、最初からの約束として、一個月に付き六圓の給費が受けられる。だから、中等學校の卒業生にして、學資の支辨の途のないものなどは、此道を選ぶのが最も好い。（但し、實際の技術のないものはこの限りでない）其代り、この科の卒業生には服務規則と云ふものがあつて、卒業證書受領の日より五箇年間

は、圖書教員として教職に従事しなければならぬ。それも、最初の二箇年間は、特に文部大臣指定の學校に奉職するの義務がある。

復た、本科の生徒で、一個月六圓の給費を仰ぎ得る途がある。

これは、實業學校——即ち地方の工業學校などの教員を養成する爲めで、日本畫、西洋畫の兩科を除いて他の各學科中のの志願者から取るのだ。畢竟、圖書師範科のやうに獨立は出来ないが、便宜上本科生徒の幾分を選んで、實業教員の補給を計つて居る譯である。

別に特待生規程と云ふのがある。これも、學資の點に幾分關係があるから、序（？）でに記して置かう——その要領は、特待生となつた其の一學年間に限り、授業料が免除されることである。

實技試験の準備

勿論、日本畫科と洋畫科の志望者に就て云ふのである。三月、豫備科入學の實技試験にフェールした人、若くは、六月の第一期試験（豫備科修了）に落された人は新に一年間の修養に依つて、翌年の合格方法を計畫しなければならぬ。それには日本畫には個人的の塾がある。西洋畫には研究所と云ふがある。

△白馬會研究所（赤阪區溜池葵橋際）

△白馬會研究所（小石川區原町五十三番地）

△太平洋畫會研究所（本郷區根津眞島町）

溜池の研究所は黒田清輝氏が統轄して居るし、原町のは長原孝太郎、小林鐘吉兩氏が主任である。眞島町の研究所には、此の派の領袖滿谷國四郎、中村不折等の諸氏が出る。此外、個人教授を

して居るのも二三個所あるが、美術學校入學に對する『高等豫備科』としては、前記の研究所を選ぶが得策である。けれど、太平洋畫會は白馬會と系統を異にし、従つて、美術學校の洋畫科には縁が遠いから、この學校に這入らうとするものには、或は理想的の準備所でないと言ふ者があるかも知れぬ。併し、吾人に在つては、敢て此點に議論はない。各自當事者の希望するが儘に任して置く。

時間は、午前、午後。又、夜間に亘つて教へることもある。何れも初學者に適切な稽古をさせるのだから、此所でみつしり一年間も勉強するならば、實技の力はぐつと昇つて、傍ら此道の事情にも通じ、知人も出來て、更に美術學生特有の氣風をも味ふことが出来るのである。

撰科の歴史と今後の狀況

こゝに残された一事項がある。それは撰科の事だ。この學校にこの科の設けられてるのは、凡そ技藝と云ふものゝ眞意義を斟酌した結果に出て居るので、世の隠れたる藝術家を待つ上に於て、能くその意を盡したものと云つても善い。規程に依ると、各本科の課目中一課若くは數課の實技を撰擇して、學修しやうとするものは、これを撰科生とし、本科生に缺員のある場合に、入學を許すとある。それで、其の資格としては、

一 年齢滿十七年以上滿二十六年以下の男子で、品行身體共に良好なる者。

一 所撰實技の試験を受けて合格した者

一 高等小學二年又は中學二年修了の者か、さもなれば、之と

同等の學力を有する者。

等で、愈右の資格が出來た場合には、次の學科目に就て、再び試験を受けなければならぬ。

△讀書(假名交り文) △作文及書取(簡易なる假名交り文) △算術(加減乗除) △歴史(日本歴史大要)

右の試験に合格したものは、撰科生として各學科に收容される。そして、入學後の撰科生は、授業其他の諸點も大抵本科生と同様で、且つ、五學年の試験に合格したものには矢張本科生と同じく、證書を授與される。

元來、規則の上では撰科の志願者は、本科生の豫科修了以上の實技力を有するものと出て居るが、苟くも撰科の志願者(特に畫の方)たるべきもので、豫科修了生位の實力を有せぬものが一人でもあるだらうか。即ち彼等の志望のある處は、形式上の資格を得るが目的ではなく、將來藝術の人として、世の中に立たうとするものであるから、此の點に至ると、學歴はないにしても、實技に於ては個人的の塾や研究所あたりで一通りの研究を濟し、且つ、技術上の自信力は充分に持つて居るのであるから、人員に制限がない限りは大抵入學に差支へない丈の程度にまで、其技術は確かに進んで居るのである。さればこそ、第一回の卒業期以來、撰科では、立派な専門藝術家を夥しく出した。其中でも、現今の洋畫界に於て、一家をなして居るやうな人々の如きは、大部分この科の出身者である。假令へば、和田英作氏の如き、小林萬吾氏の如き、湯淺一郎氏の如き、北蓮藏氏の如き、其外山本森之助、中澤弘光、岡野榮、小林鐘吉、橋本邦助、和田三造等諸氏の如き

も皆なそれで、此等の諸君あるが爲めに、撰科の歴史は何時迄も燦たる光輝を放つて居るのである。此點から云へば、肝腎の本科は寧ろ顔色なして、今日専門美術家として社會に重きをなして居る人は、實際寥寥たるものだ。

これと云ふのも、從來の本科生に對する教育なるものが、専門の美術家を作ると同時に、また一面中等學校の圖畫教員たるの資格を具備させるべく企圖して居たから、自然斯くの如き結果を呈したものだと思はれる。

併し乍ら、昨年（一九〇八年）の六月、文部省令第十八號に於て新に圖畫師範科加設の事が發表されたので、中等學校の教員は一にこの科の獨占となつた。されば今後の本科生は、從來の撰科の特色を其儘讓受けて、多くの専門美術家を出すことだらう。同時に、學校の方でも、從來の方針を多少改める處あり、日本畫洋畫兩科に於ける撰科生の新募集は、今後或は行はれずに終るかも知れない。現に今年の洋畫科一年には、撰科生を保有して居らぬ。今後、若し撰科生の募集があつたら、其數は洵に僅少なるものであるだらう。入學期は多くの場合〔毎年九〕年の九月で、試験は、夏季休暇前に行はれるのを例として居る。そして、募集の廣告は、矢張官報紙上で發表されるのだ。

最後に、吾人は曾て黒田教授が洋畫科志望の學生に對して語られた談話の一節を摘出して、結末の言に更へやうと思ふ。それは、——眞正の美術は眞似や氣取りで出来るものでない。それには、矢張正當の順序を踏んで稽古をなし、正當に費すべき時間を費やし、苦みもし、而も天賦の才ある人にして、初めて成功するのである。

ある。されば、今後本當に繪畫で身を立てやうと云ふ人は、一時流行の繪端書や、雜誌の口繪位に満足せず、急かす振らず、眞面目な稽古を爲なければならぬ即ち、繪を以て樂みとはせず、却て苦しみとする程の覺悟が是非欲しいのであると。その所謂眞面目——これぞ眞に藝術家のモットーで、また生命である。味ふべき文字ではあるまいか。

〔『中学世界・學事顧問』『中学世界』第十一卷第八号。博文館臨時増刊二十一。明治四十一年六月〕

⑤ フェノロサ死去

一九〇八年（明治四十一年）九月二十一日、アーネスト・F・フェノロサはヨーロッパ旅行中ロンドンで心臓発作により急逝した。五十五歳であつた。遺骸は一旦ロンドンのハイゲート墓地に葬られ、翌四十二年に三井寺法明院に改葬される。

フェノロサ死去の報道は明治四十一年九月二十七日の『東京朝日新聞』の外電によつて齎され、引き続き新聞や雜誌に關係記事が掲載されたが、特にフェノロサと關係の深い本校では『東京美術學校校友会月報』第七卷第二号に屋代鈇三による左記の追悼文を載せた。

謹みて弔意を表す

嗚呼フェノロサ博士

（晁江稿）

我校創立當時の恩師として、又我美術の推獎者鼓吹者として、貢獻せし所少からざりしフェノロサ氏は、先頃英京倫敦〔ロンドン〕に於て易簧